

【 復活讃詞 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、ばんぺいしせしもののご
 天使 軍 爾 墓 現 番 兵 死 者 の の 如
 と し 、 マリヤはかにたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね
 墓 立 爾 潔 體 だ を た づ ね
 た り 。 なんぢはぢごくにいざなわれずして、ぢごくをとりに
 爾 地 獄 誘 地 獄 を と り こ
 に し 、 いのちをたもうものとして、しよぢよにあいたま え り 、
 生 命 賜 者 處 女 逢 給
 しよりふくかつせししゅよ、こうえいはなんぢにきす。
 死 復 活 主 光 榮 爾 歸 す 。
 こうえいはちちとことせいしんにきす、いまもいつもよよに、アミン。
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今 何 時 世 世

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

しととひとしくどうぎなるもの ちゅうじつにしてしんちなる
 使 徒 等 と し く 同 座 な る も の 忠 實 に し て し ん ち な る
 ハリスト スのえきしや、せいなるしんにえらばれたるふえ、ハリストスの
 役 者 聖 神 撰 筆 笛
 あいにみちた るうつわ、わがくにのこうしよ うしや、
 愛 満 た る 器 我 國 の 光 照 う し や 者

あしとしゆきょうせいニコライよ、なんぢのぼくぐんのため、
 亜使徒主教聖 爾 羊 群 爲

およびぜんせかいのため、いのちをたもうせいさんやにいのり
 及 全 世 界 爲 命 賜 聖 三 者 祈

たまえ。

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、

アミ ン。

【 聖三祝文 】



せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第6調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、^{しゅ}主よ、^{なんぢ}爾の^{たみ}民を^{すく}救い、^{なんぢ}爾の^{ぎょう}業に^{ふく}福を^{くだ}降し^{たま}給え、



しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうにふくをくだしたま
主 爾 民 救 爾 業 福 降 したま



え。

誦經) ^{しゅ}主よ、^{われなんぢ}我爾に^よ呼ぶ、^{われ}我の^{かため}防固よ、^わ我が^{ため}爲に^{もだ}黙す^{なか}母れ、



しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうにふくをくだしたま
主 爾 民 救 爾 業 福 降 したま



え。

誦經) ^{しゅ}主よ、^{なんぢ}爾の^{たみ}民を^{すく}救い、



なんぢのぎょうにふくをくだしたま え。
爾 業 福 降 したま

【 使徒經 (アポストロス) 220 端 エフェス書2章4節~10節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒パヴェルが^{じん}エフェス人に^{たつ}達する^{しょ}書の^{よみ}讀、

司祭) ^{つつし}謹みて^き聴くべし、

誦經) ^{けいてい}兄弟よ、^{あわれみ}矜恤に^と富める^{かみ}神は、^{そのわれら}其我等を^{あい}愛する^{おおい}大なる^{あい}愛に^よ縁りて、^{われらつみ}我等罪に^よ由りて^し死

^{もの}せし者を^{とも}ハリストスと^い偕に^{なんぢら}生かせり、^{おんちよう}爾等恩寵を^{もつ}以て^{すく}救われたり、^{かれ}彼と^{とも}偕に^{ふくかつ}復活せ

しめ、^あハリストス・^{てん}イイススに^ざ在りて^{みらい}天に^よ坐せ^{おい}しめたり、^{その}未來の世に^よ於て、^{その}其ハリストス・^いイイス

スに^あ在りて^{われら}我等に^{ほどこ}施し^{じんじ}し仁慈を^{もつ}以て、^{おんちよう}恩寵の^{あふ}溢れたる^{とみ}富を^{しめ}示さん^{ため}爲なり。^{けだし}蓋

^{なんぢら}爾等は^{おんちよう}恩寵を^{もつ}以て^{しん}信に^よ由りて^{すく}救われたり、^こ是れ^{なんぢら}爾等に^よ由るに^{あら}非ず、^{かみ}神の^{たまもの}賜なり、

^{おこない}行に^よ由るに^{あら}非ず、^{ひと}人の^{ほこ}誇る^{ため}こと^{けだし}なからん^{われら}爲なり。^{かれ}蓋我等は^{つく}彼の^{もの}造りし者にして、^ハハ

リストス・イイススに在りて善き功の爲に造られたり、即 神が我等の行わん爲に、
 預め備えし所なり。

(比較用 口語訳)

兄弟たちよ。あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をもって、罪過によって死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かし——あなたがたの救われたのは、恵みによるのである——キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである。それは、キリスト・イエスにあってわたしたちに賜わった慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった。あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇る事が出来ないためなのである。わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第6調 】

司祭) 睿智、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) 至上者の覆の下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) 主に謂う、爾は我の避所、我の防禦、我が頼む所の私の神なりと、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

め ひら なんとち ふくいん おしえ さと たま わ うち なんとち ふく いましめ
 の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を
 おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんとち よろこ ところ
 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
 おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
 を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
 なんとち わ たましい からだ こうしょう われらなんとち なんとち むげん ちち しせいしぜん
 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
 いのち ほどこ なんとち しん こうえい けん いま いつ よよ
 て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書53端 10章25~37節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 彼の時一の律法師イススに就きて、彼を試みて曰えり、師よ、我何を爲して永遠

の生命を嗣がんか。彼は之に謂えり、律法に何をか録せる、爾如何に読むか。答えて曰え

り、爾心を盡し、靈を盡し、力を盡し、意を盡して、主爾の神を愛せよ、

またなんとちとなりあいのれごとこれいなんとちこたところただ

又爾の鄰を愛すること、己の如くせよ。イスス之に謂えり、爾の答えし所正し、

これなすなわちいしかかれおのれぎほついでいわとなり

之を爲せ、乃生きん。然れども彼は己を義とせんと欲して、イススに謂えり、我が鄰

とは誰ぞや。イスス答えて曰えり、或人イエルサリムよりイェリホンに下る時、盜賊に遇

へり、彼等其衣を剥ぎ、彼に傷つけ、幾と死するばかりにして、彼を捨て去れり。適

ひとりしさいこみちくだかれみすすさおなかしこいたちか

一の司祭是の路より下りしが、彼を見て、過ぎ去れり。同じくレヴィトも彼処に至り、近

づきて彼を見て、過ぎ去れり。惟或サマリヤ人は行きて、此に至り、彼を見て憫み、就き

かれ かんご あくるひゆ とき ぎんにまい いた あるじ あた これ い こ
 彼を看護せり。明日行かんとする時、銀二枚を出し、館主に與えて、之に謂えり、此の
 ひと かんご ついえも これ ま われかえ ときなんぢ つくの こ さんにん うち なんぢ
 人を看護せよ、費若し之より益さば、我返る時爾に償わん。此の三人のうち、爾
 いづれ ぬすびと あ もの となり おも かれい こ ひと あわれみ ほどこ もの
 孰を盗賊に遇いし者の隣と意うか。彼曰えり、此の人に矜恤を施しし者なり。イ
 イス 彼に謂えり、往きて、爾も是くの如く行え。

(比較用 口語訳)

ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましようか」。彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか」。彼は答えて言った、「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります」。彼に言われた、「あなたの答は正しい。そのとおりに行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」。イエスが答えて言われた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を歩いて行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を歩いて行った。ところが、あるサマリア人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリーブ油とぶどう酒とを注いでほしいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」。彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行って同じようにしなさい」。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。
 主 光 榮 いは 爾 歸 し、 光 榮 いは 爾 歸 す。

※聖体礼儀③ (金ロイオアン聖体礼儀) へ